まぼろしの二十一世紀

小松左京

集英社文庫

まぼろしの二十一世紀　0193-750282-3041

昭和54年11月25日　第1刷
昭和55年1月30日　第2刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　小松　左京

発行者　堀内　末男

発行所　株式会社 集英社
東京都千代田区一ッ橋2—5—10
〒101
電話　東京 (230) 6361 (編集)
(238) 2781 (販売)

印刷　図書印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。　(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

© S. Komatsu 1979　Printed in Japan

集英社文庫

まぼろしの二十一世紀

小松左京

集英社版

目次

まえがき対談……七
第一部　ユーモア篇
なかがき対談（一）……一三
さらば、貧乏神よ……一四
お月見の前に……一八
卵と私たち……二〇
オートナイ……二九
人生保険……三三
社内結婚……三九
クロスカウンター……四五
生きがい銀行（バンク）……五一
中毒……六〇
誤配……六二
消えた預金……六四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

落しもの……七二
むかしばなし……七四

第二部　ファンタジー篇

なかがき対談 (二)……八六
スケールの問題……八八
淫蕩の星……九六
Dシリーズ……一〇五
遺跡……一一五
正月日記二〇一×年……一一八
通天閣発掘……一二八
長い旅……一三一
ひきつぎ……一三四
あちらとこちら……一四一
トップレディーむかしむかし……一四七
パパ……一五七

満腹の星……一六六
まぼろしの二十一世紀……一七三
高層都市の崩壊……一七七
ドーナッツ……一八二
すぐそこ……一八八
都市を出る……二〇〇
あとがき対談……二〇五
対談……小松左京・土屋　裕

まえがき対談

小松左京・土屋 裕

小松　目次をみると、なんともなつかしいね。

土屋　ユーモア篇とファンタジー篇にいちおう分けてありますけど、内容はもりだくさんですね。スペースものあり、タイムマシンものあり、風刺ものあり、怪奇ものあり、エイリアンが出てきたり、濃厚エロチック・スペースポルノなんてものまである。腹いっぱいになることうけあい……。

小松　ちょうど「満腹の星」なんてのも入っている。（笑）

土屋　あの作品のオチにはまいりました。

小松　まぁ、それは読者のみなさんに読んでもらうとして、よくもまぁこんなにたくさん古い作品を発掘したね。ぼくの著書では、単行本・文庫本すべて未収録なんだが……。

土屋　ワセダ・ミステリ・クラブと小松左京研究会（以下、小松研（コマケン）と略――編集部）で著作リストを作ってみたんです。

小松　へえ。小松研て言えば、女性メンバー少しは増えた？

土屋　はい、十二人ばかり。……それにしても小松ファンに女性が少ないのは、どうしてでしょう

ね。

小松　どうしてだろうな。……きっと日本の女性ファンの目が、まだ成熟してないんだよ。（笑）年増のファンはわりといるんだけど、彼女たちはファンクラブなんかに来ないんだな。残念でした。

土屋　はぁ……（しばし絶句）。でもこの中に収録されている「パパ」なんか、若い女性の感性に訴えるところ大なんだけどな……。

小松　まぁ女性はともかく、小松研（コマケン）の会員は二十代が多いんだろ。

土屋　そうですね。ぼくを含めて二十代前半が圧倒的です。星さんや筒井さんのファンクラブの平均年令層にくらべると三歳くらい上なんですけど、それでも例の著作リスト、ワセダ側がフィクションを、それ以外の部分を小松研（コマケン）が担当して作成したんですが、ＯＢの層の厚いワセダと違って、小松研（コマケン）はなんといっても若いのばかりですから、苦労しました。

小松　そうだろうね。

土屋　でも、小松ファンの中には、本当にマニアと言うに価する人たちがいるんですよね。ぼくより一つか二つ年下の会員で、どこでどうやってみつけたのか知りませんが、大昔の雑誌広告までちゃんと手に入れて、保存しているんです。おぼえていらっしゃいますか、ナントカ・カラーテレビの広告で小松さんが息子さんたちとご一緒に出ているやつ。あれなんですよね。

小松　なぁるほど。おそろしいのがいるな。ファン網（もう）カイカイだな。（笑）

土屋　それでは、少し本篇の収録作品について触れていただけませんか。

小松　うん。実は、例のぼくの著作リストをみせてもらって驚いていたんだ。このショート・ショート集の前に『一生に一度の月』を出したんだが、それに全部収録したつもりで、まだ落していたのがあったんだな。つまり第一部の「中毒」「誤配」「落しもの」（しゃれにもなりません――編集部）は

朝日の〝六〇〇字ショート〟シリーズからの、第二部の「ドーナツ」は『新刊ニュース』シリーズからの落ちこぼれなんだよね。

土屋　第二部の『笑の泉』に掲載したのなんか記憶にありましたか。

小松　ああ、あれを書いたのは、たしか東京オリンピックの頃だ。エッセイなんかだと、自分でも何を書いたのかさっぱりだけど、フィクションになると短いものでも案外おぼえているんだ。もっとも、内容はおぼえていてもタイトルを忘れていたり、その逆に、タイトルはおぼえているんだが、内容があやふやなんてことはあるけど……。

土屋　そういう意味では、どうしてこんなにたくさんの単行本・文庫未収録の落ちこぼれができちゃったんですか？

小松　それはね、単行本や文庫で短篇集を出すとき、自分なりにテーマ別にしたり、長さをそろえたり、目次面を考えたりするわけだ。そして、これとこれは次にまわそうなんて思っているうちに、忘れちまうんだな。そう、忘れるというより、こんな作品もあったあんな作品もあったと、時々思い出すんだが、なにしろミニコミの雑誌だとかPR誌だと、そもそもどこに書いたのかを忘れてしまうし、たとえおぼえていても、それを探すのがめんどうになっちまって、あげくの果てがそのままってことになる。なかなかかえしてやれなかったんだな。

土屋　かえす……？　というと、あの、裏を返すというあのことで……。

小松　よせよ。そいつあ考えすぎだ。「線無派」が変に気をまわさない方がいい。（笑）この中にもあるだろう、「卵と私たち」だよ。

土屋　（落胆して）ああ卵を孵すということで……。では、落ちこぼれだからといってカスばかりというわけでは……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小松　×◎□●☆!!（意味不明の叫び。あわてたあまり舌をかんだらしい――編集部）ミもフタもない事をいうなよ。

土屋　ミもフタもないってことは、つまりそうだということで……。

小松　ヒェーッ！　そ、それは言うてはならんことじゃ。（笑）選択基準はきびしくあるから、この中にもなかなかいいものがあるんだぞ。

土屋　あ、それぼくのビールですけど。

第一部　ユーモア篇

なかがき対談 (一)

土屋　お読みになって、何か想い出していただけましたか？

小松　うん。……「さらば貧乏神よ」を書いた三八年の暮れというのは、小説で食えるようになって、やっとひと息ついた頃なんだ。ぼくは三二年に結婚して、その頃からおやじの工場を手伝い始めたんだけど、これがもう借金ばかり。給料遅配で女房の嫁入り道具のラジオを質に入れて流しちゃった。

土屋　例の〝アパッチ伝説〟の誕生ですね。

小松　そうだ。そこら辺の話は『一生に一度の月』の時、横田順彌（ヨコジュン）としたから省くけど、まあそんな状態でやってきて、三七年十一月の『ＳＦＭ』に「易仙逃里記」が初めて掲載されて、三八年になってからはほぼ毎月のように『ＳＦＭ』に顔を出すようになった。そうしたら女房が喜んじゃってね、「こんなに稿料がいいんなら、もっと書きなさい」って。

土屋　その頃の原稿料って、いくらぐらいですか？

小松　……一枚手どりで三百円。

土屋　え？　たったの？

小松　うん。でも、例の〝ニュース漫才〟の台本は、一枚八十円で源泉一五パーセントひかれてたんだよ。もう、天国と地獄だね。

土屋　へえ……。

小松　で、三八年の前半ぐらいで、おやじの工場の借金を、友人知己から八ところ借りで返し終って、……そのあたりからポツポツと、ほかの雑誌からも注文が来るようになった。

土屋　『別冊サンデー毎日』の「釈迦の掌」や『オール読物』の「紙か髪か」ですね。

小松　そうそう。だんだん想い出して来たぞ。『オール読物』には「紙か髪か」の前に四十枚のものを二本書いてるんだ。それも一週間ぐらいの間にね。

土屋　へえ。何ですか？

小松　たしか「愚行の環」と「痩せがまんの系譜」だったな。両方とも編集者が気に入らなくてボツにされた。あとで『別冊宝石』『SFM』に載ったけどね。――話を戻すと、三八年の十一月に、光文社に『日本アパッチ族』を渡してね、初版部数が決まりましたってんで、印税を前借りさせてもらった。

土屋　『アパッチ』が出たのは、翌年の三月でしたね。

小松　九月には次男が生まれてたんで、その印税でもって、それまで住んでた二間のアパートから借家に引っ越した。……だから「さらば貧乏神よ」なんてのは、その喜びが出てるんだな。

土屋　ははあ。ずいぶん世帯染みたお話ですね。

小松　ほんと、あの頃の作品には、世帯染みた裏話がいろいろあるんだよ。

土屋　「卵と私たち」なんかもそうですか？

小松　いや、これは……たしか筒井(康隆)さんとのバカ話から、ネタを思いついたんだ。

さらば、貧乏神よ

二人にとっては、ひどく暗い歳末だった。

子供の病気や、離れのぼやや、物価はやたらに上るし、ケネディ暴落で、わずかな株は底値ではなしてしまうし、なけなしの金で買っておいたわずかな土地は、あとからインチキだとわかった。かててくわえて――ああ、なんたる事か！――営業不振で例年の三分の二しか出なかったボーナスを、電車の中でスラれるという、まさにふんだりけったりのありさまだったのである。

「それというのもみんなあの貧乏神のせいよ……」と二人目を腹にかかえた妻の英子は、ベソをかきながらいった。「なんだって、あなたのご先祖は、あんなツボなんかおいといたのよ」

「おれの先祖にケチをつけるな！」武夫はどなった。「人のポケットのなかみとか、ひき出しの中とか――なんでもやたらにのぞきたがるお前が悪いんだ！」

そのツボというのは、今年の五月、祖母が死んだあとひきうつってきた、この田舎の家の納戸の中に、ほこりをかぶってころがっていたものだった。――木箱の中にぼろぼろになった紙といっしょにはいっていて、口は油紙でしばり、その上に梵字（ぼんじ）が書いてあった。何にでもネコみたい

に好奇心をしめす英子が、掃除の最中に、油紙をやぶって中をのぞいてみた。――うすいほこりみたいなものが立ちのぼっただけで、中はカラッポだった。

「ねえ、これ、なんと書いてあるのかしら？」英子はボロボロの紙を武夫にみせてきいた。「むかしの字は、わかンないのよ」

武夫だって得意ではなかったが、それでもやっと判読できた。それには曾祖父の署名のもとに、こう書いてあった。

「貧乏神一体、このツボに封ず。二百年たたざるうちは、かまえて開くなかれ」

「貧乏神ですって？」英子はふきだした。

「あなたのひいおじいさんて、迷信家なのね」

「迷信じゃないよ」と二人の背後でしゃがれた声がした。「出してもらって、ありがとう」

ギョッとしてふりかえると、髪ぼうぼうのやせこけた男が、黒い衣を着て、ボリボリ背中をかきながら、うずくまっていた。

「あんたの先祖にとじこめられたのは、文久年間だったから、まだ百年しかたってない」やせた男は、歯の欠けた口をあけてニタニタ笑った。「あのまま二百年たったら、ツボの中でほこりになる所だった。――さて、ひとあばれさせてもらうかな」

「お前はほんとに貧乏神か？」武夫はぼう然としていった。

「その通りさ」と男は手にもった古ぼけた暦をめくりながらいった。「今日は――まだ春だな。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com